



# 「野鳥便覧」 を読む

日本野鳥の会大阪支部 室内例会

2009.9.13

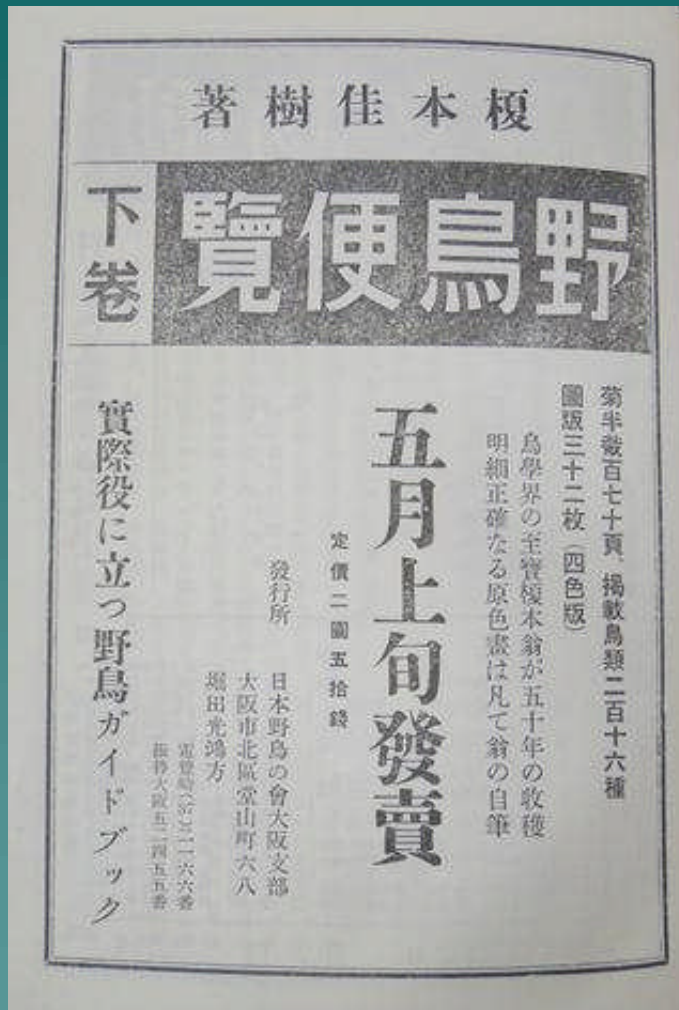
担当 納家・上村

# 「野鳥便覧」とは



上巻 昭和13年(1938年)、下巻 昭和16年(1941年)  
日本野鳥の会大阪支部(上巻は前身の阪神支部)が発行

# 広告コピー



菊半載百七十頁。

掲載鳥類二百十六種。

図版三十二枚(四色版)

鳥学会の至宝榎本翁が五十年の収穫

明細正確な原色図はすべて翁の自筆

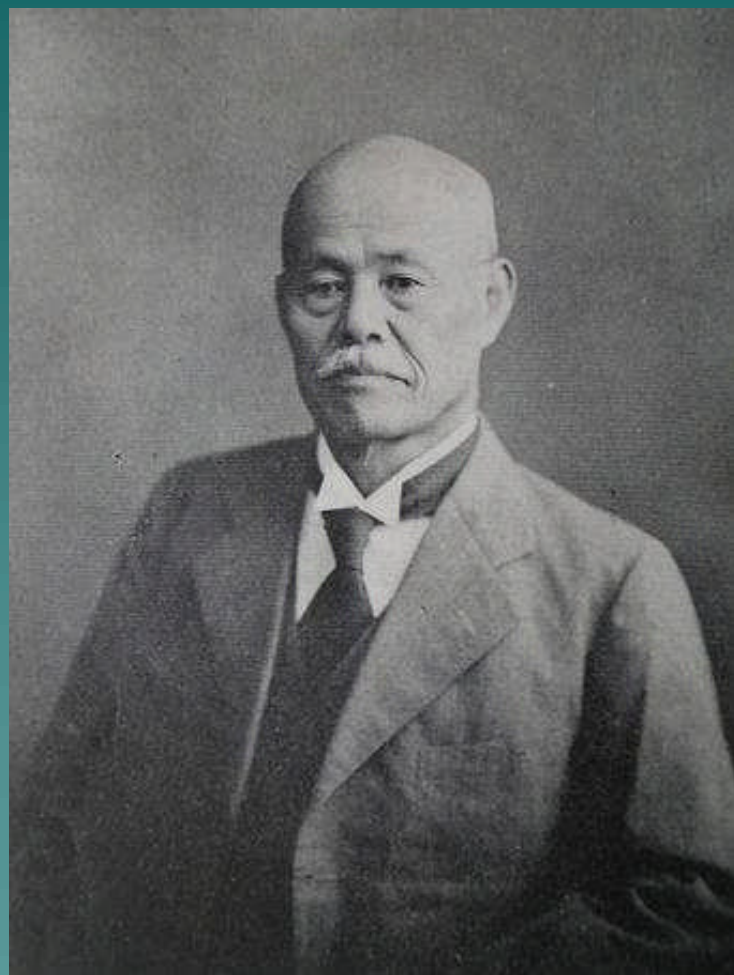
實際役に立つ野鳥ガイドブック

定価 二円五十銭

▲「野鳥」昭和16年11月号広告  
野鳥便覧下巻

参考 当時の物価 白米10kg: 3円25銭

# 榎本佳樹とは



「野鳥」榎本佳樹翁古希記念特集号  
から転写  
(1938年当時 66歳の肖像写真)

- 明治6年(1873年)徳島市生まれ
  - 陸軍幼年学校から士官学校に進み、明治30年(1897年)以降、明治44年まで軍人生活を送る。
  - 大正5年(1916年)日本鳥学会入会
  - 大正6年、高野山中学に奉職
  - 昭和8年(1933年)退職までの16年間を高野山で過ごされ、付近の鳥類調査を実施
  - 昭和8年、山を下って大阪に転居、大阪支部の实地指導者となる。
  - 昭和20年(1945年)1月急逝
- 著書に、「野鳥便覧」の他、「野の鳥の思い出」(1942年)があり、又、動物学雑誌、鳥、野鳥、農林省発行の鳥獣報告集等に数多くの報告、論文を残されている

# 美しく正確な図版

- 生息環境を背景に
- 野鳥画としての価値も高い

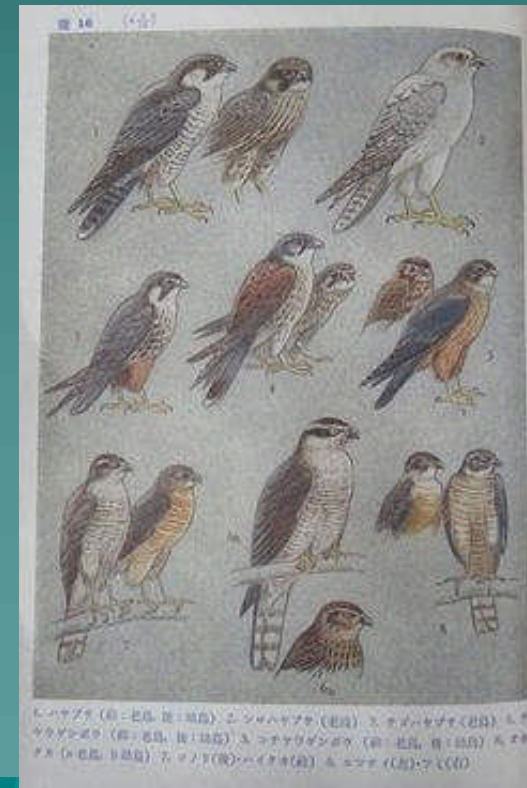


小さく描いたため、細部が表れていなかったり、省略された部分があったりするのやむを得ないことである。しかしながら相当親切に描いたつもりであるから、図画の欠点のため、種類の違ったものに見える様なのは、沢山あるまいと信じている。

鳥のみを描いた一般的な図版

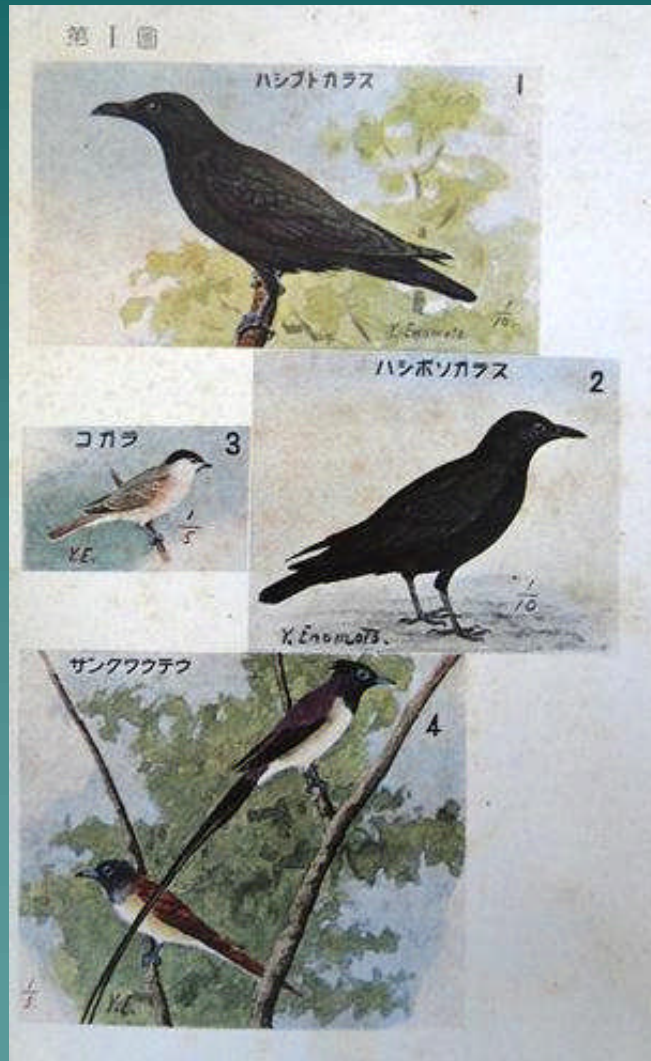
原色野外鳥類図譜

昭和13年 下村兼史著



# 「野鳥便覧」 上巻

78種17葉の図版



第 三 圖



第 三 圖



第 V 圖

セグロセキレイ



キセキレイ



チコモズ



ヤマガラ



エナガ



コシアカツバメ



ハヤブサ



第 VI 圖

ホシロ



キビタキ



イハヒバリ



コルリ



イハツバメ



カハセミ



モズ





第 VII 圖



第 VIII 圖



第 IX 圖

ツバドリ



クワクワ



ジフイチ



第 X 圖

アカセウビン



アカモツ



ヨツバ



ヤマセミ



第 XI 圖



第 XII 圖



第XIII圖

ハリヲアマツバメ



ツツナ

2



カホタカ

3



第XIII圖

チヤウゲンボウ



イヌワシ

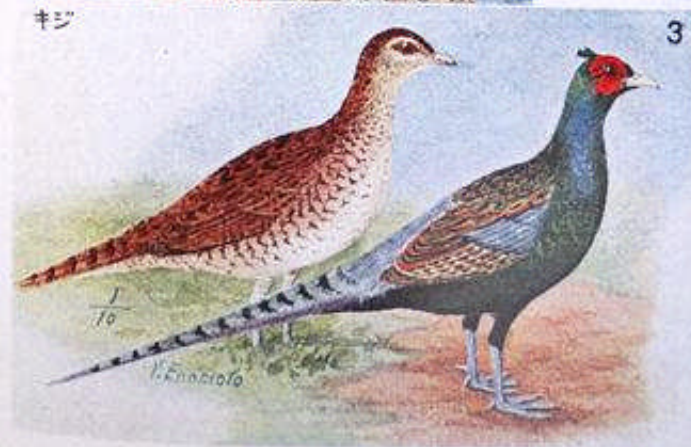
2



第XV圖



第XVI圖



第XVII圖



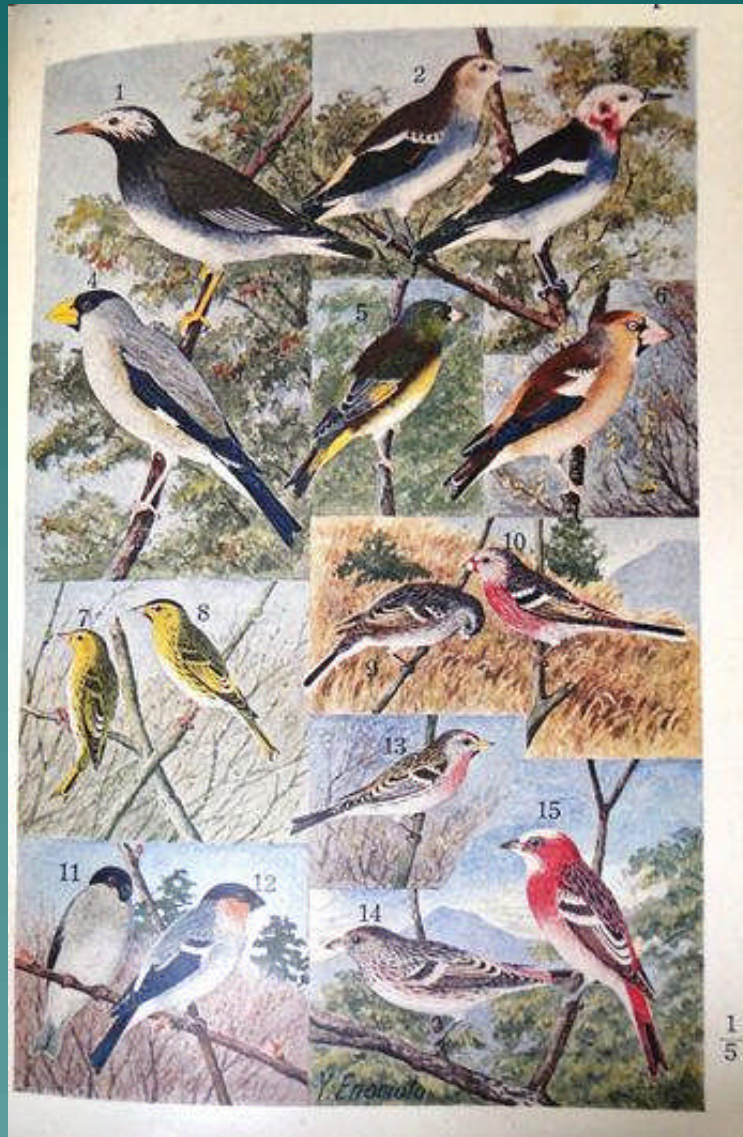
第XVIII圖

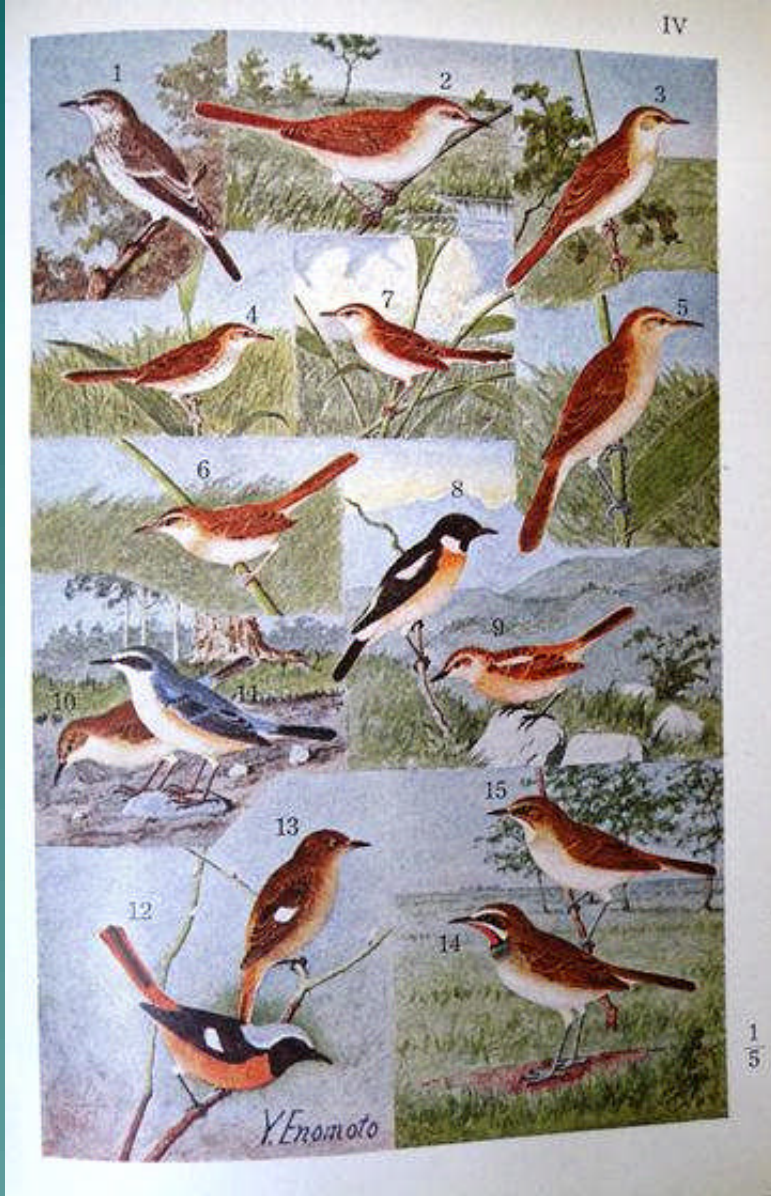


大きさ標準鳥類比較略圖

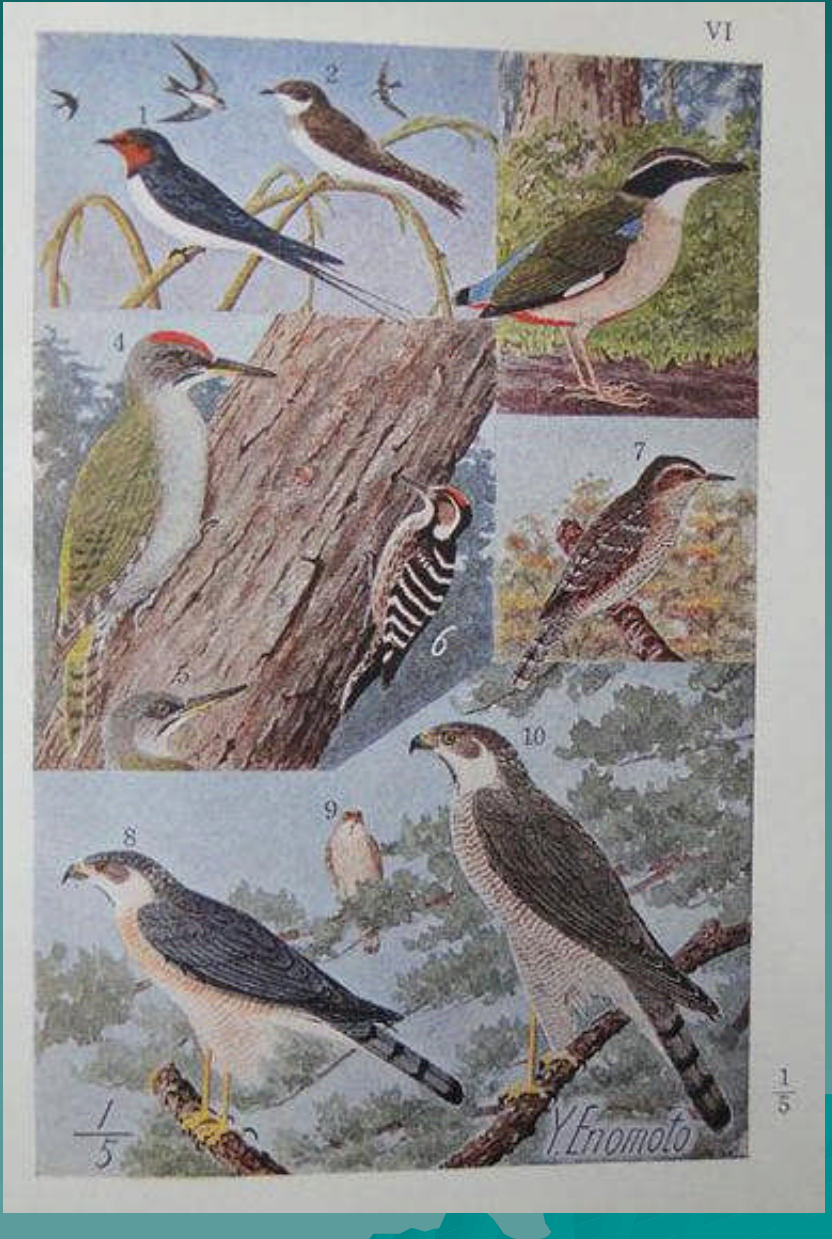
- 1 スミメ
- 2 ムクドリ
- 3 キジバト
- 4 ハシボソカラス
- 5 トビ

# 「野鳥便覧」 下巻 216種32葉の図版

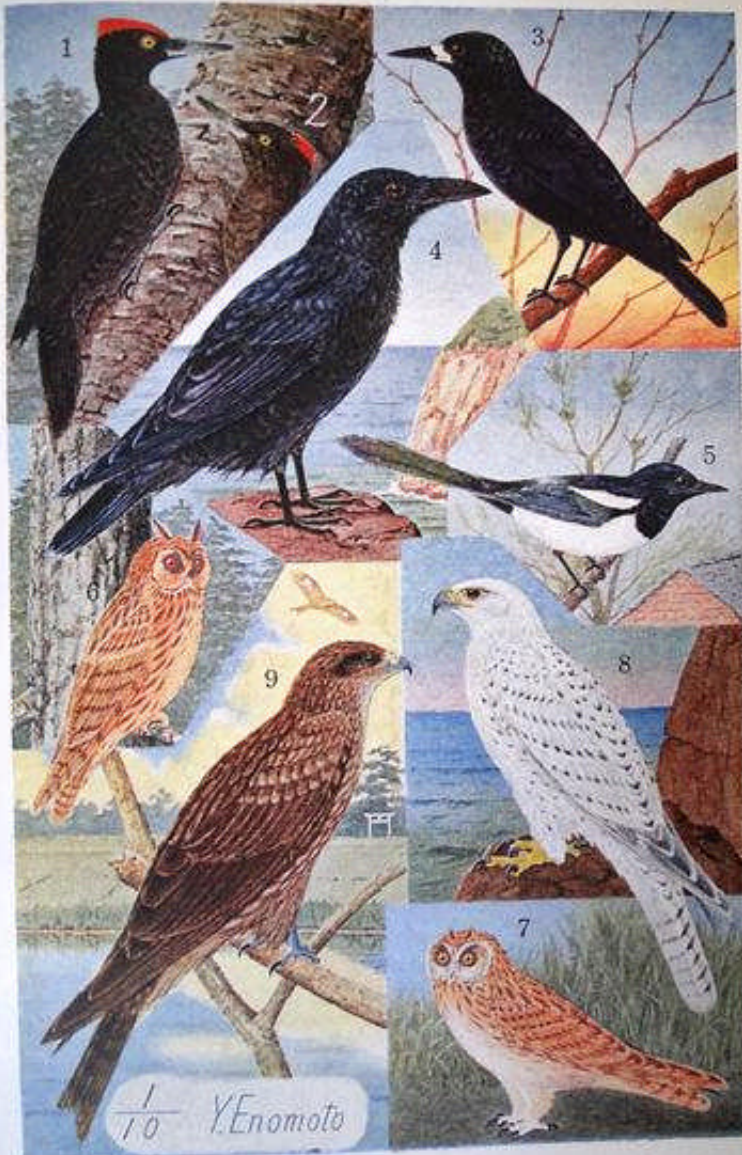






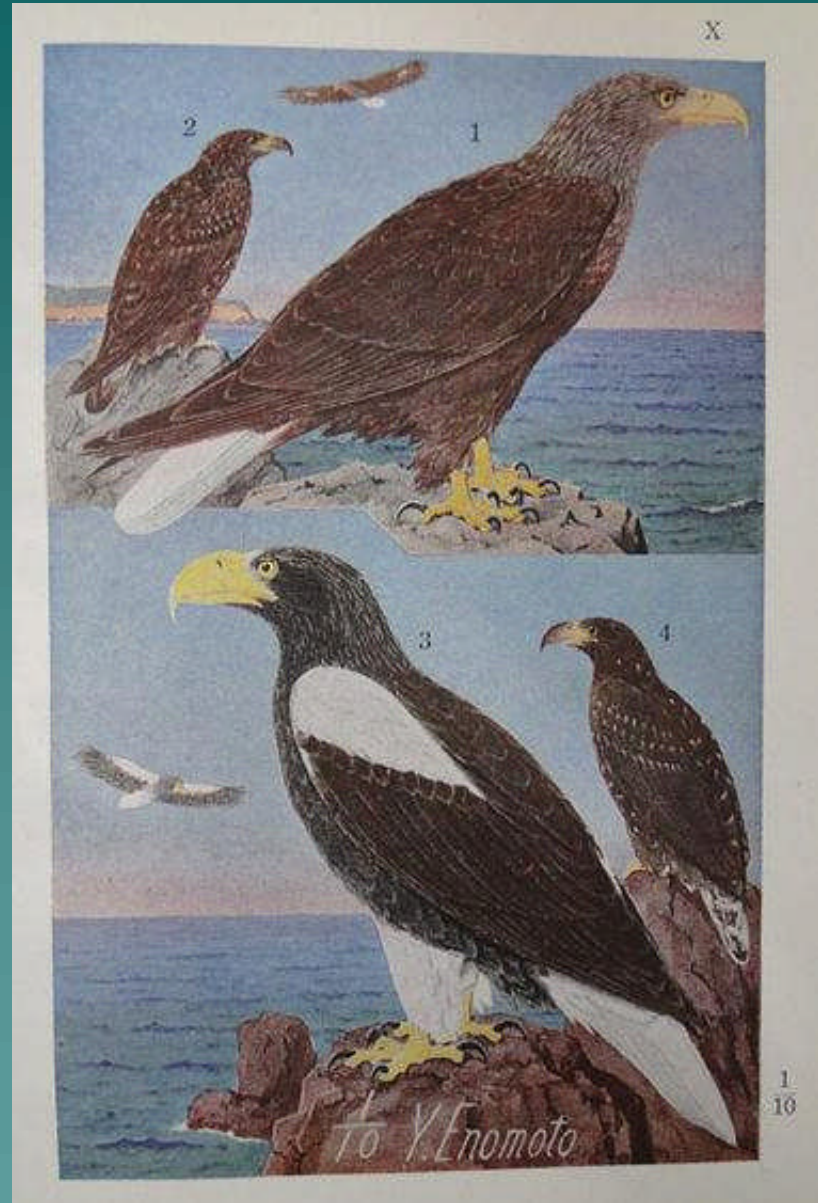
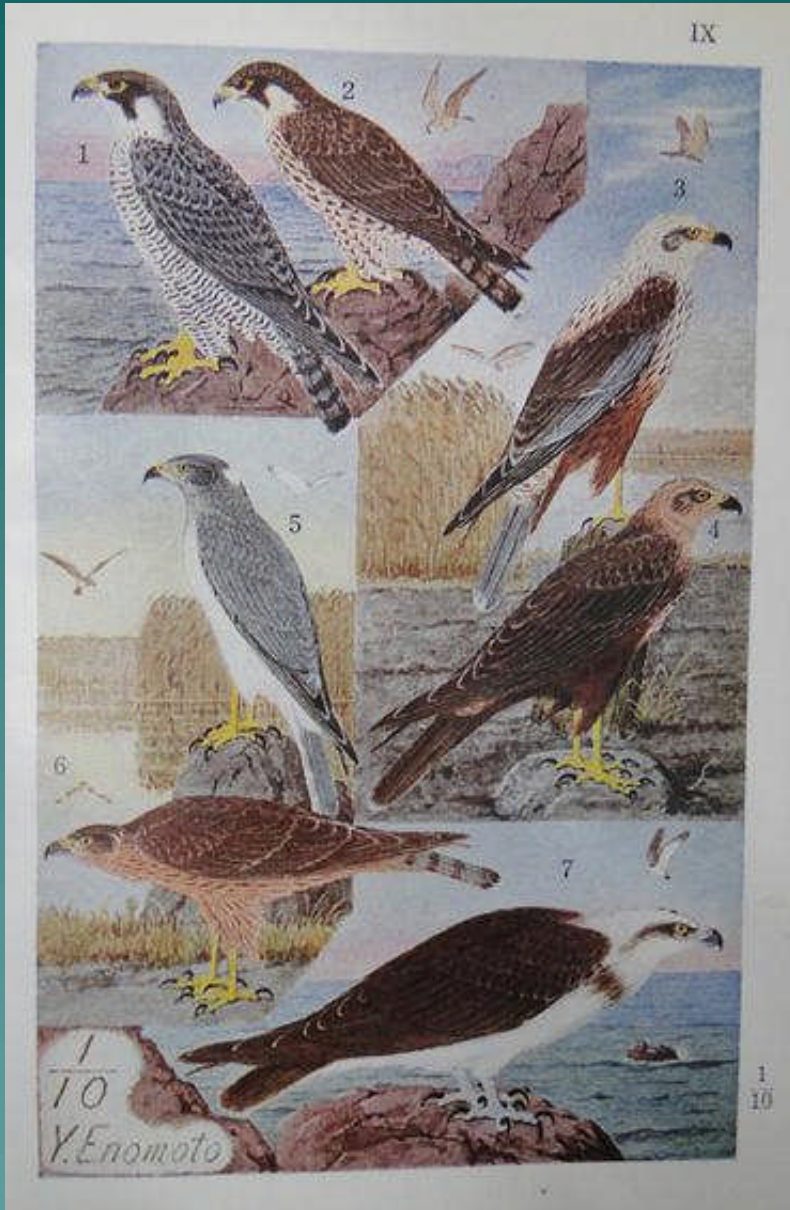


VII



VIII





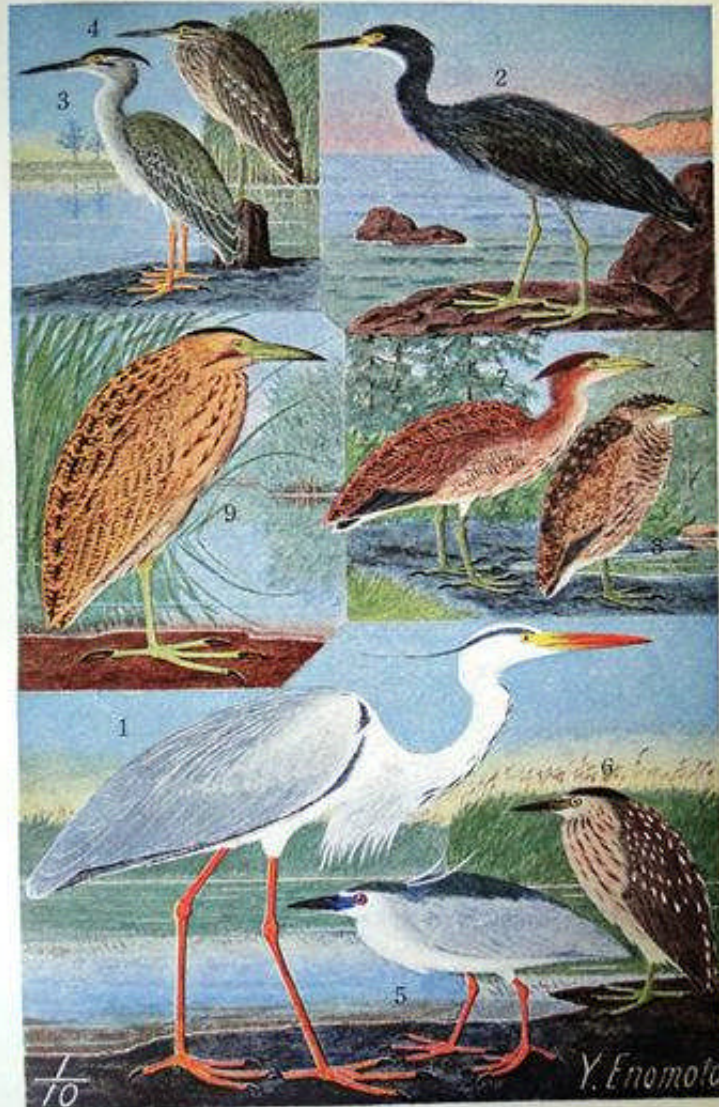
XI



1/20

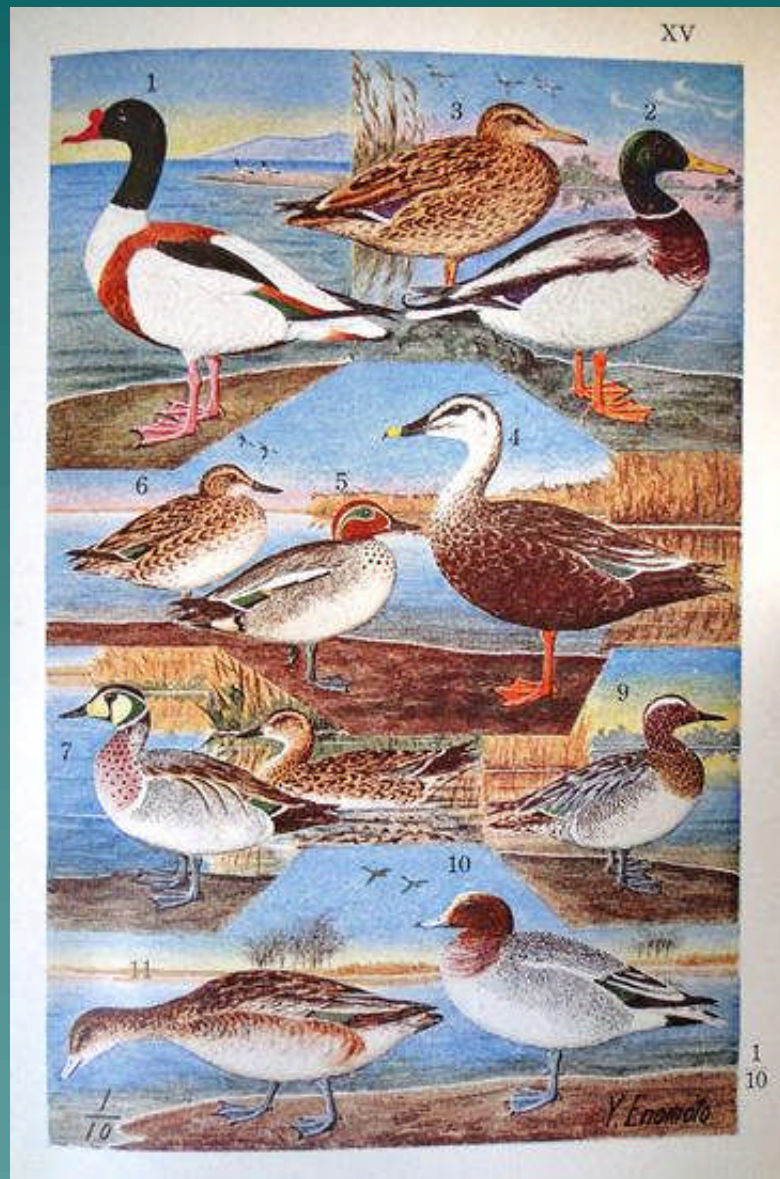
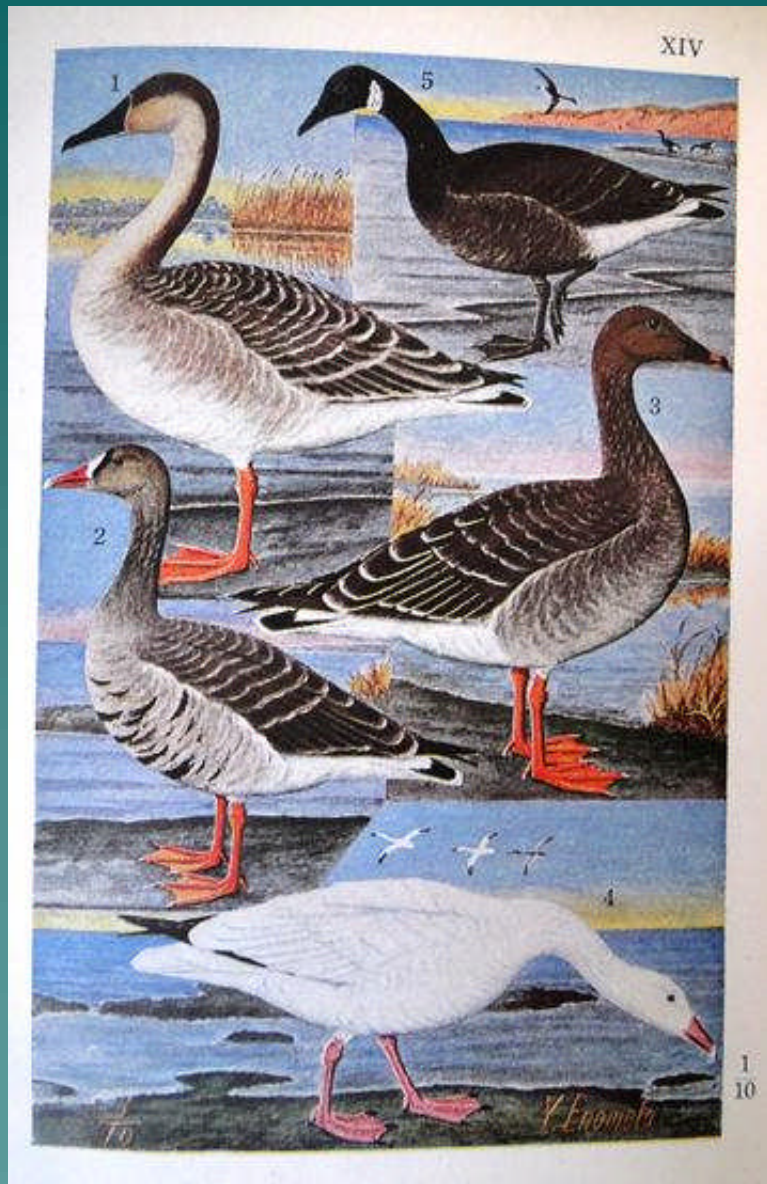
Y. Enomoto

XIII

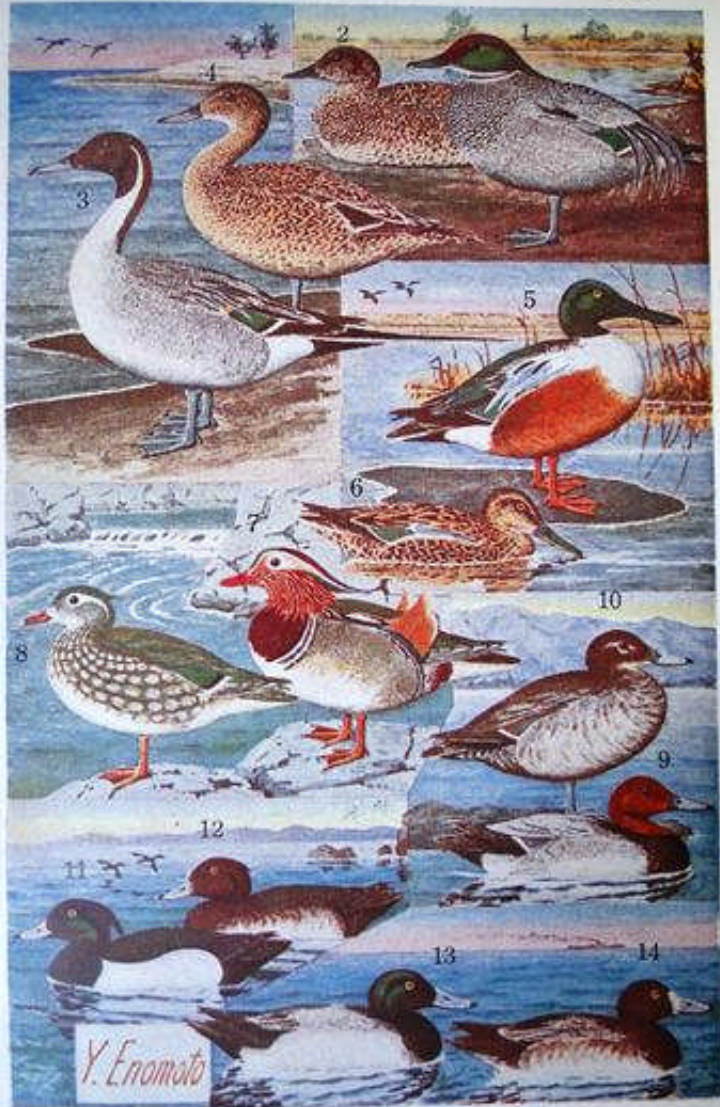


1/10

Y. Enomoto

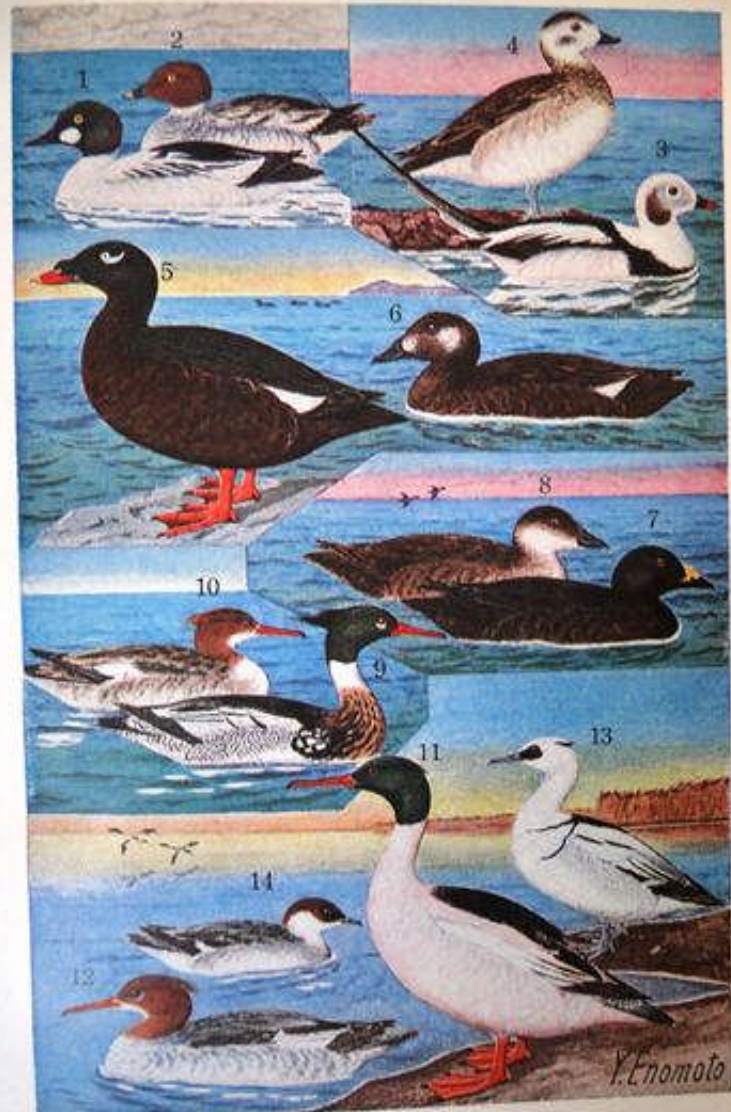


XVI

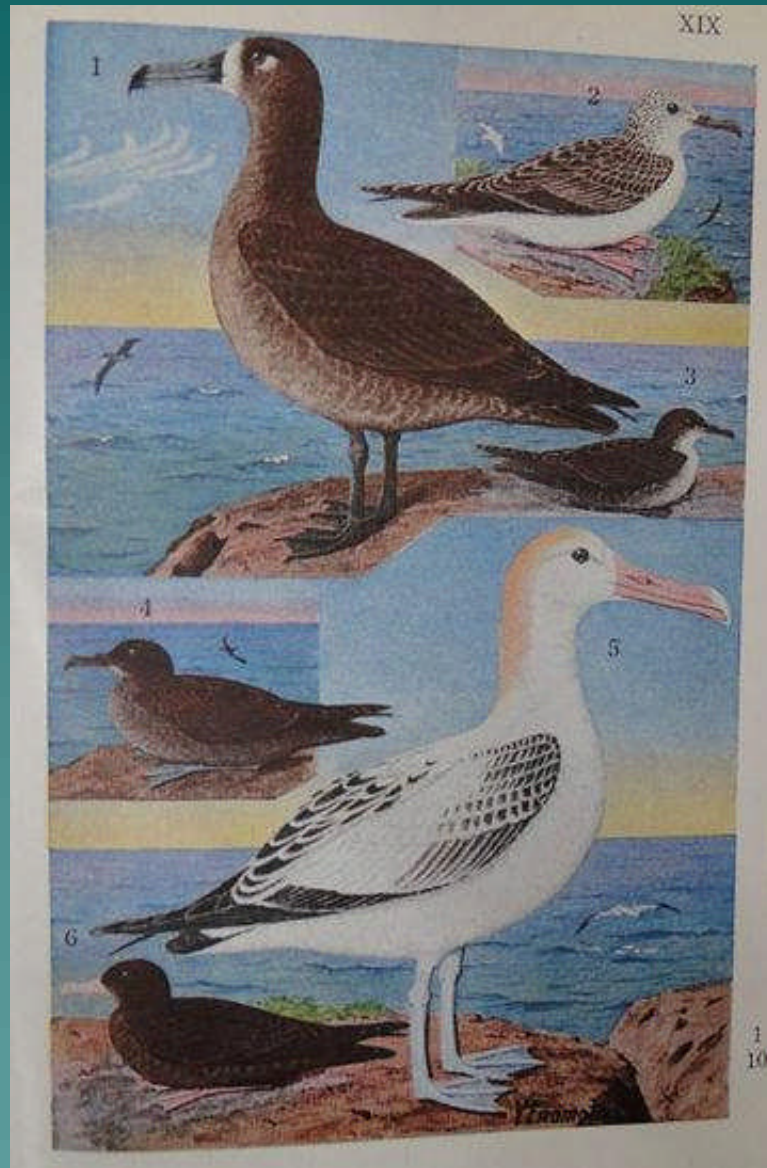
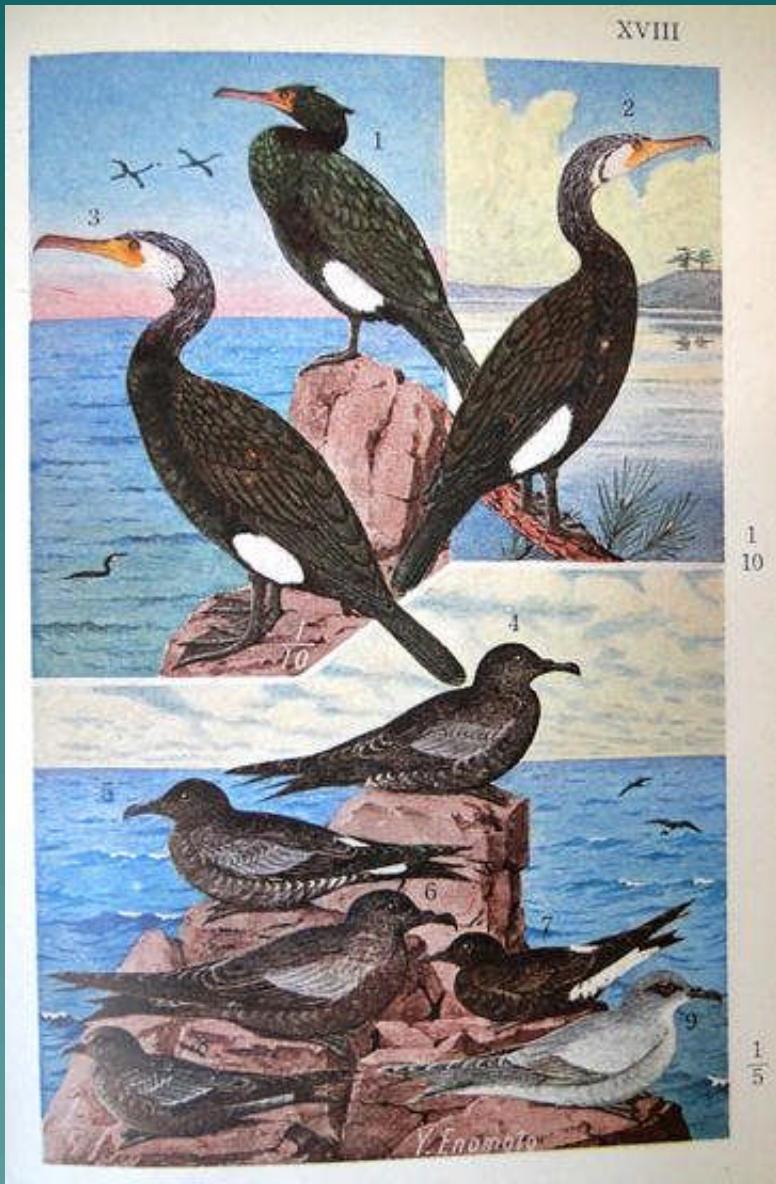


1  
10

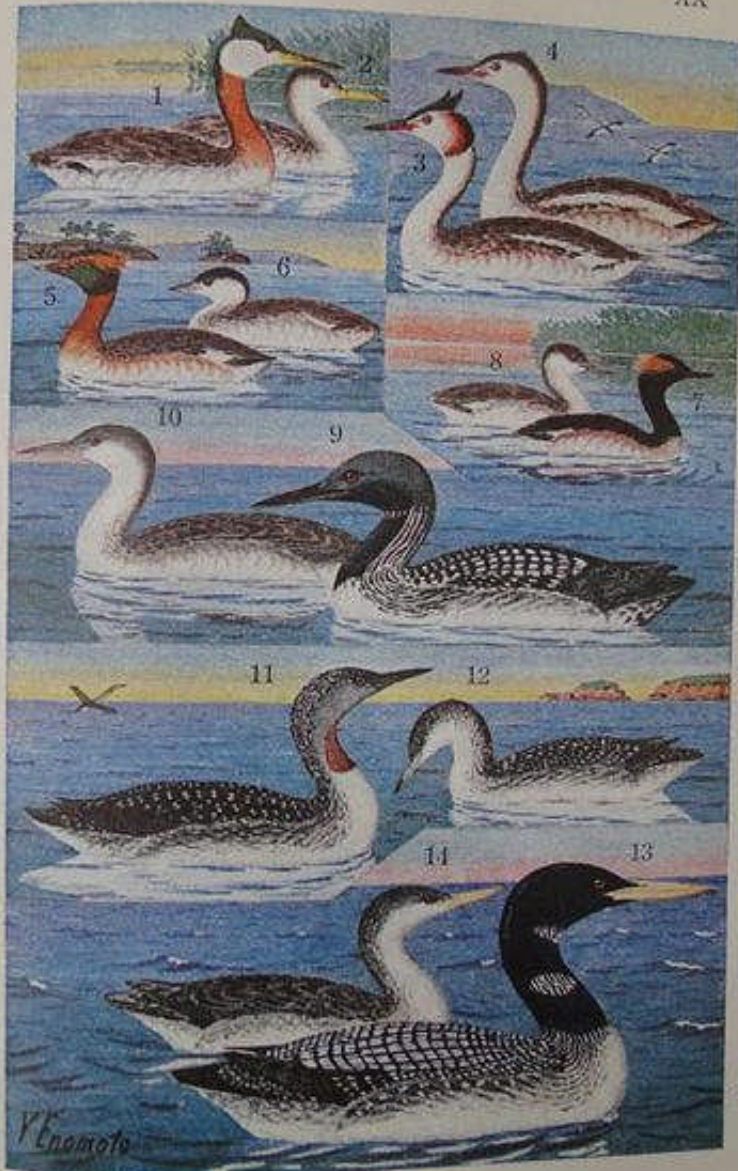
XVII



1  
10

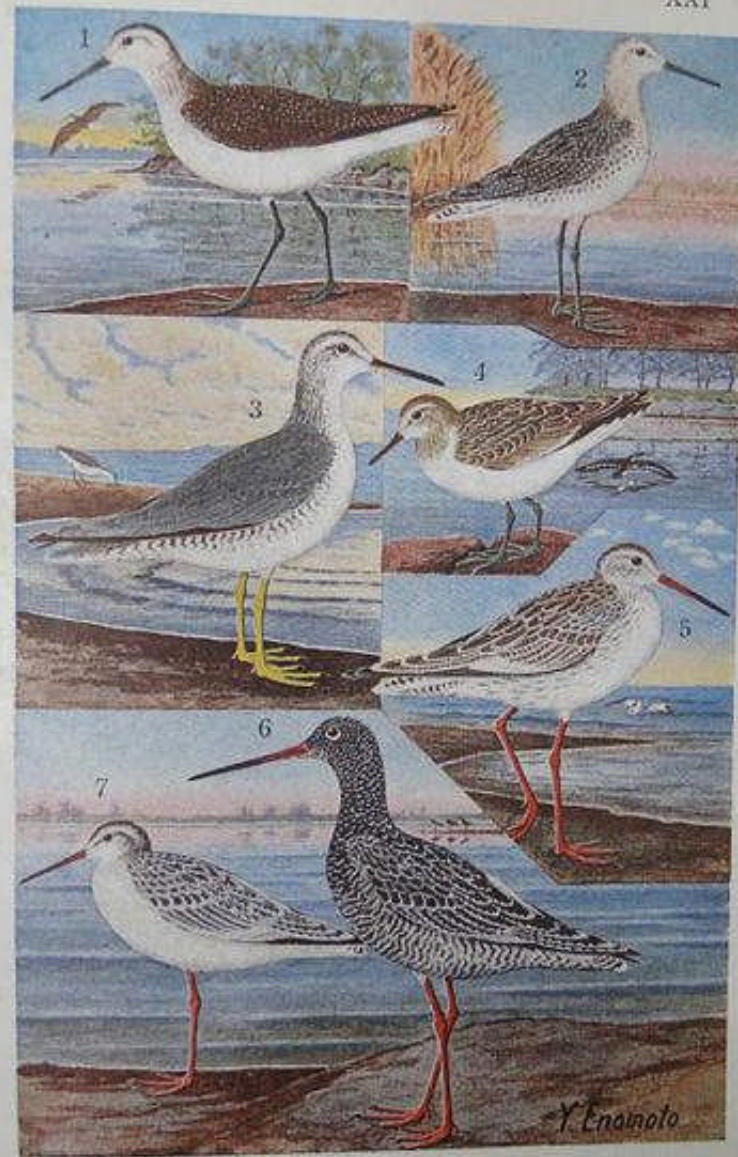


XX



1/10

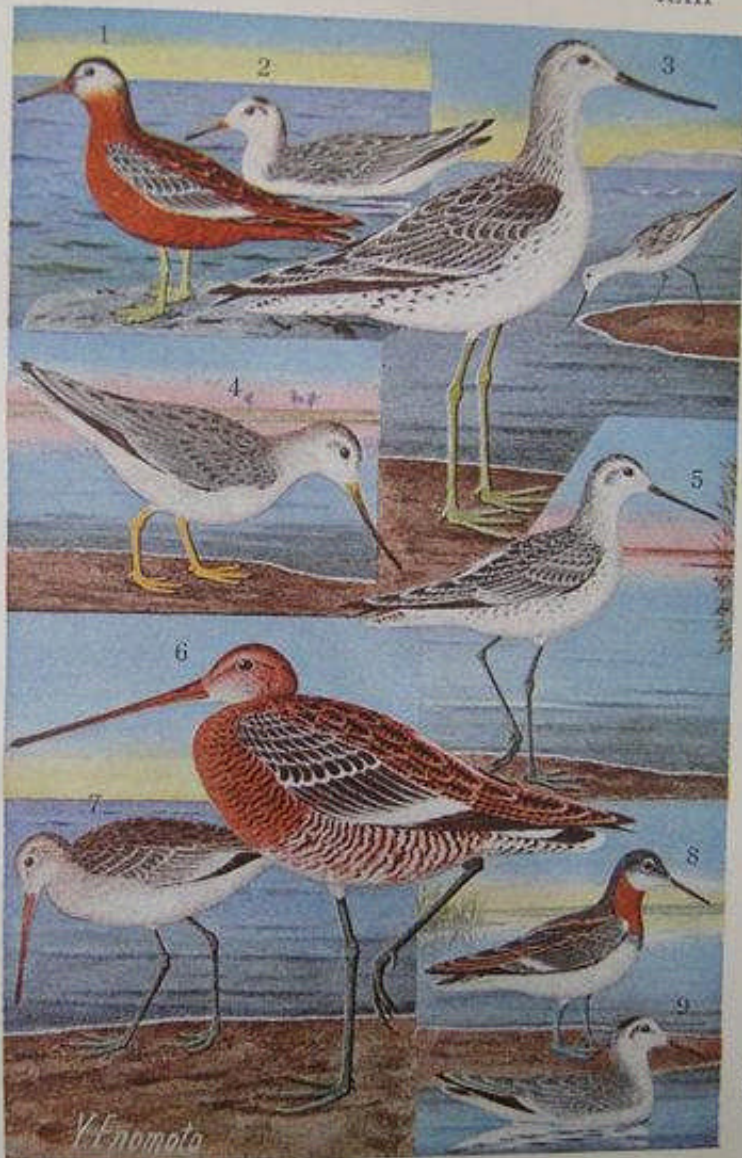
XXI



1/5

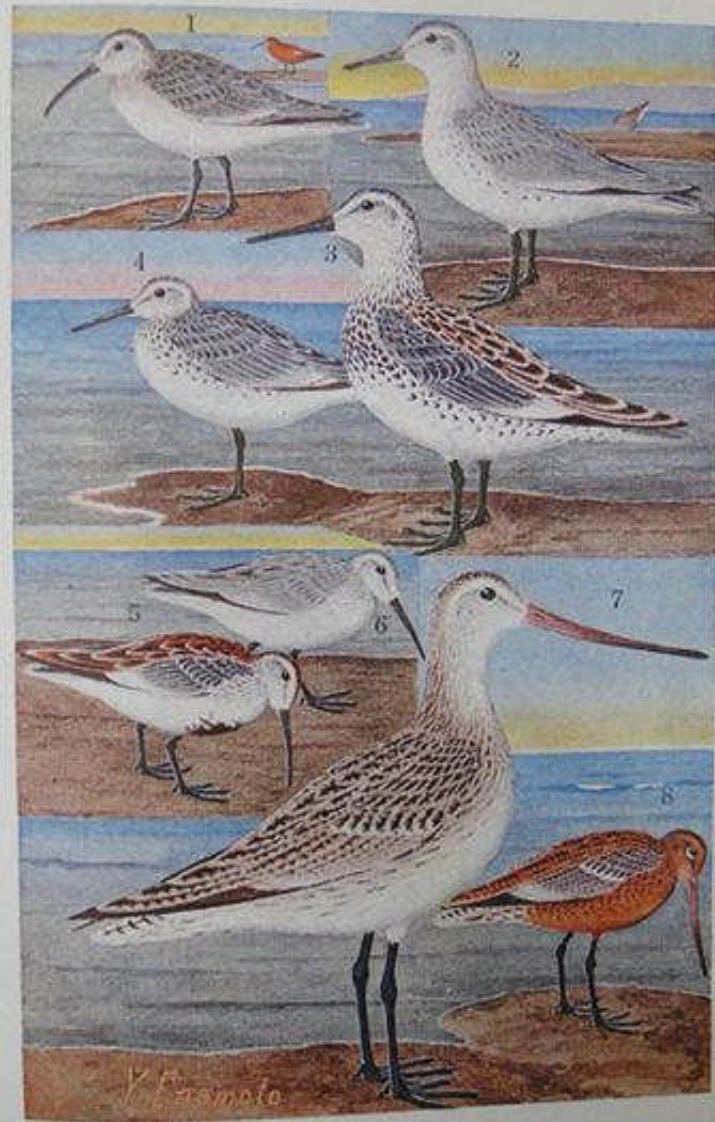


XXII



1/5

XXIII



1/5

XXIV



1  
5

XXV



1  
5

XXVI



1/5

XXVII



1/5

XXVIII

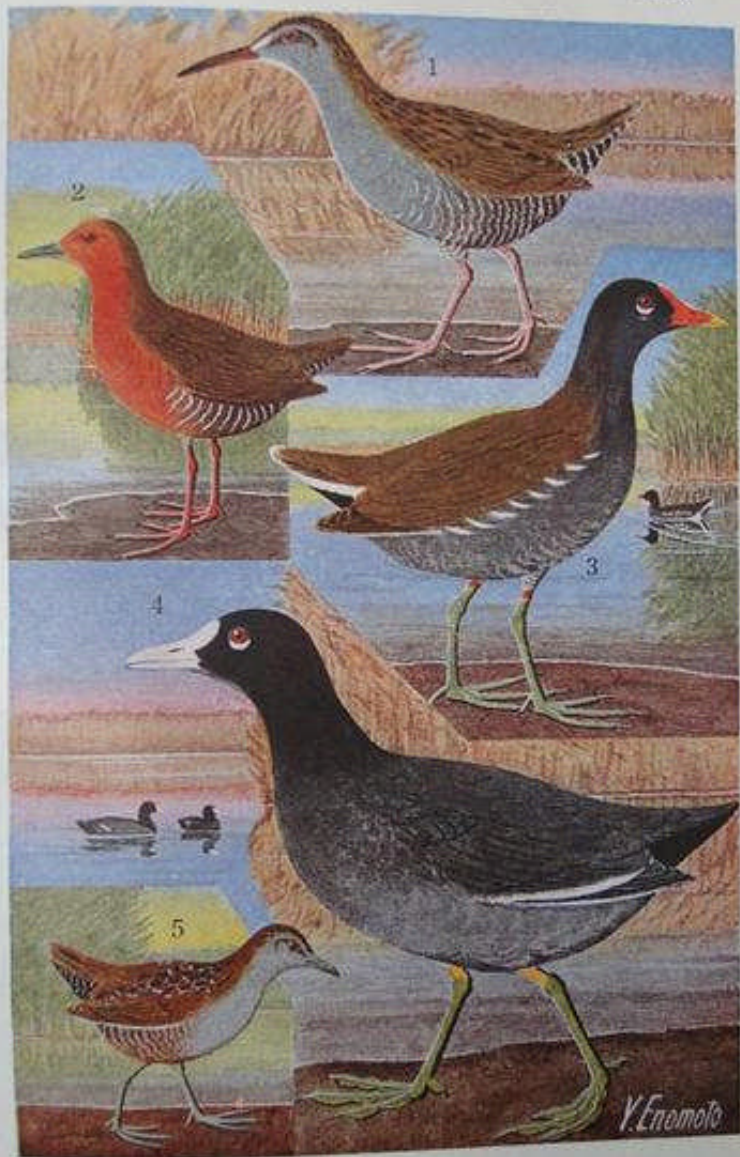


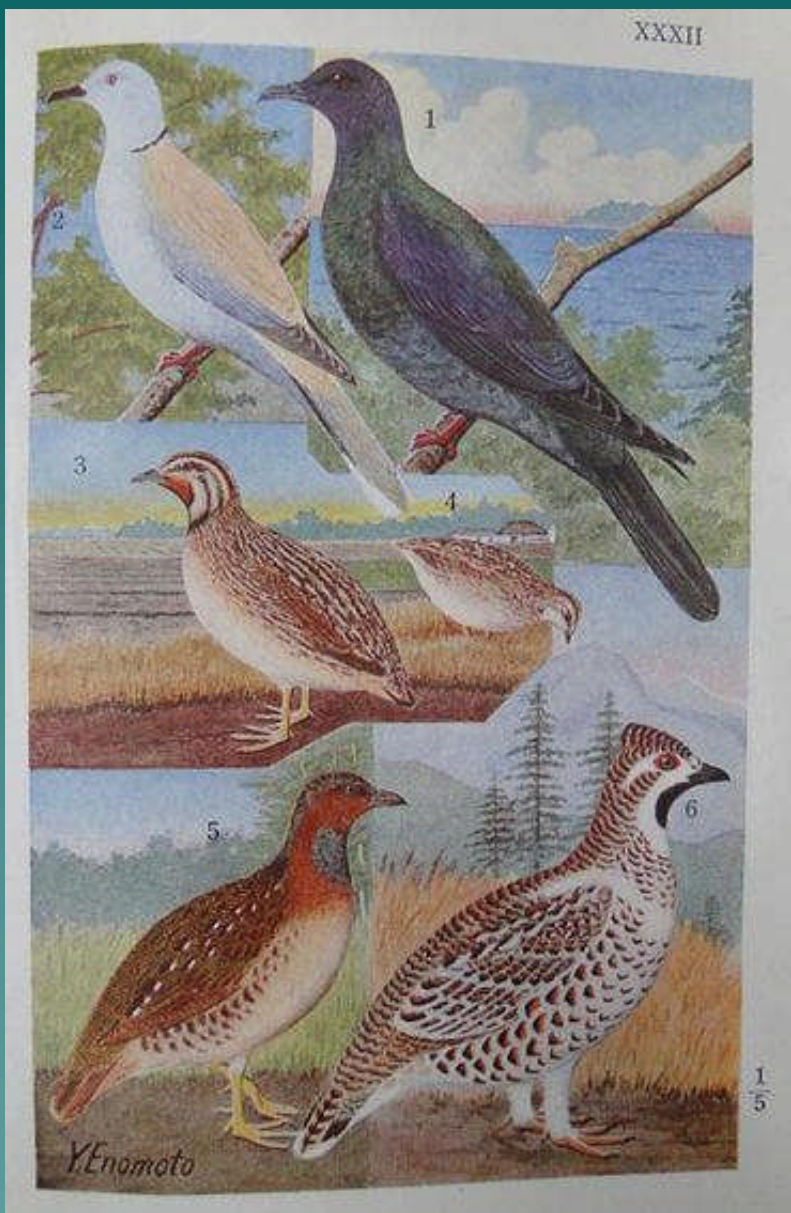
1  
10

XXIX



1  
10





發行所  
發賣所

大阪市北區堂山町六八 櫻田方  
振替口座大阪五二四 五五番  
振替口座東京一一六三番



圖版禁轉載

印刷者

大阪市西區阿波座中通二ノ二三  
余部博章

發行者兼  
著者

大阪市北區都島北通四ノ一三  
榎本佳樹

昭和十六年六月十五日印刷  
昭和十六年六月二十日發行

野鳥便覽 下卷

定價金二圓五十錢

日本野鳥の會大阪支部  
合資會社  
大阪東區北久太郎町四丁目  
柳原書店  
東京市神田區神保町三丁目

# 下巻巻末の日本産主要鳥類測定表

鳥名	全長(種)			翼長			尾羽長			嘴峰長			跗蹠長			翼開張			體重(克)		
	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均
ハシブトガラス	595	532	565	375	330	356	245	210	228	70	65	68	70	60	63	1105	985	1048	220.0	138.0	178.0
ハシボソガラス	540	462	502	347	300	324	212	176	195	60	45	53	65	57	61	1065	910	985	194.0	114.0	150.0
ミヤマガラス	495	436	468	336	300	312	185	160	173	62	50	57	55	45	52	947	882	895	154.0	95.0	
カサハギ	480	400	445	213	180	200	260	200	233	35	30	33	50	43	45	620	515	573	72.0	45.0	59.0
ツナガ	385	342	365	138	130	135	230	200	218	28	26	27	36	34	35	428	380	406	21.9	17.6	18.9
*ホシガラス	365	325	347	195	178	187	143	125	135	45	40	43	42	39	41	603	573	594	63.0	38.0	
カケス	340	315	328	173	155	167	154	138	147	31	29	30	41	38	39	520	482	500	42.0	30.0	36.0
ムクドリ	243	225	238	135	123	129	70	63	68	27	24	26	31	27	30	412	383	404	26.0	18.0	23.0
コムクドリ	198	183	192	110	102	105	54	48	51	17	15	16	26	23	25	328	303	318	18.0	12.0	14.0
シメ	192	179	185	108	95	100	58	52	55	21	19	20	22	20	21	325	302	314	17.0	12.0	14.0
イカル	235	220	228	115	106	111	86	80	82	24	22	23	25	22	24	342	320	332	23.0	16.0	19.0
オホカハラヒワ	162	146	155	92	81	87	68	55	61	12	10	11	20	17	18	277	250	265	8.2	6.1	7.0
コカハラヒワ	144	125	135	84	75	78	53	42	48	12	10	11	17	15	16	237	205	222	6.6	4.5	5.3
マヒワ	130	117	124	75	71	73	50	43	47	11	10	10.5	15	13	14	229	206	218	4.3	3.0	3.6
ベニマシコ	158	145	152	72	65	67	75	67	71	8	7	7.5	18	16	17	216	200		5.6	4.1	4.7
ウソ	161	148	156	88	79	85	67	60	64	10	9	9.5	17	15	16	266	245	257	7.9	5.7	6.7
*オホマシコ	180	162	173	95	87	91	74	65	70	12	10	11	21	19	20	285	257	274	8.9	5.8	7.6
*イスカ	186	170	180	100	90	96	70	60	65	19	16	18	19	17	18	290	265	281	11.8	9.0	10.4
アトリ	170	148	161	98	85	93	70	58	65	14	12	13	20	18	19	275	239	254	7.6	4.7	6.3
スズメ	148	135	144	75	65	68	57	50	53	12	10	11	18	16	17	234	213	227	7.0	4.8	6.0
ニウナイスズメ	144	131	139	75	67	70	52	46	50	12	11	11.5	18	16	17	228	208	220	6.8	4.7	5.6
ミヤマホハジロ	164	147	156	78	70	74	74	63	68	12	10	11	20	18	19	218	197		6.3	4.4	5.3
アヲジ	163	151	158	74	70	72	70	64	66	12	11	12	22	18	20	225	208	221	6.7	4.8	5.7
ノジコ	148	135	142	74	65	68	60	52	56	11	10	11	19	17	18	215	196	206	5.8	4.4	4.9
ホハジロ	168	158	165	81	71	76	75	70	73	12	10	11	20	18	20	245	230	240	7.0	5.2	6.1
ホアカ	165	148	160	78	68	73	70	60	65	13	10	12	22	20	21	234	213	231	7.0	5.1	6.1

現在の図鑑のほとんどが、この測定値を引用している

表中の全長や翼の開長などは、室内鳥学者には必要の少ないものであるが、野外で活鳥を観察する場合、鳥の大きさの概略を知るためには、翼長よりもはるかに多く役立つものであり、また体重は、それによって鳥類実体の大きさの大要を察知することができるものである。

鳥名	全長(耗)			翼長			尾羽長			嘴峰長			跗蹠長			翼開張			體重(匁)		
	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均
コサメビタキ	135	120	129	76	65	71	52	45	49	11	9	10	15	12	14	225	200	214	3.9	2.6	3.2
エゾビタキ	153	138	147	89	81	85	54	46	51	11	9	10	15	12	13	268	243	255	6.5	5.0	5.8
サメビタキ	140	127	136	82	75	79	54	48	52	10	8	9	15	12	13	233	212	223	4.7	3.3	4.1
*ムギマキ	140	118	131	80	66	75	59	43	52	12	9	10	16	15	16	228	192	213	3.9	2.8	
キビタキ	144	129	136	80	73	76	57	45	52	12	10	11	18	13	15	232	201	219	4.3	3.2	3.8
オホルリ	170	152	163	100	86	95	68	58	65	13	11	12	17	15	16	290	258	266	7.2	5.3	6.4
メボウ	136	111	124	70	62	68	56	45	52	12	10	11	20	19	20	215	176	204	3.2	2.2	2.8
センドイムシクヒ	133	116	127	66	58	63	53	44	50	12	10	11	18	16	17	204	178	191	3.2	2.2	2.8
ウグヒス	162	134	156	69	55		65	58		12	10	11	25	20	23	210	174		5.5	2.9	4.7
ヤブサメ	112	95	105	56	52	53	34	25	30	12	10	11	20	17	19	163	138	153	3.0	2.1	2.6
*エゾセンユウ	185	170	179	87	79	83	75	67	72	17	15	16	28	26	27	265	243		8.2	6.3	
*シマセンユウ	158	145	153	76	70	73	58	50	55	16	14	15	25	20	23	230	210		6.1	4.9	
オホヨシキリ	194	166	184	90	78	85	78	62	72	19	17	18	30	25	28	272	233	258	9.4	6.1	8.2
コヨシキリ	140	122	133	58	52	56	55	45	51	12	10	11	22	19	21	204	178	194	4.0	2.8	3.5
セツカ	130	112	124	57	50	53	52	42	47	10	9	10	22	19	21	165	142	157	3.0	2.2	2.7
トラツグミ	308	277	296	160	150	155	120	100	112	30	25	28	38	32	35	490	418	471	42.0	31.0	37.0
マミジロ	245	221	233	128	115	121	90	80	85	23	18	20	31	28	29	395	356	376	23.0	17.0	20.0
クロツグミ	223	207	216	120	109	114	80	70	76	21	19	20	33	28	30	352	327	341	19.4	14.4	16.8
シロハラ	252	234	245	130	120	125	93	90	95	22	19	21	32	30	31	398	370	387	24.7	17.0	20.9
アカハラ	246	225	237	125	120	122	95	83	90	21	19	20	35	30	32	388	355	374	23.5	16.3	20.0
ツグミ	252	225	240	135	120	127	100	83	92	20	17	19	35	30	32	410	374	390	24.7	17.0	20.9
イソヒヨドリ	242	223	234	130	118	123	88	80	85	24	20	23	34	30	31	390	357	377	23.5	16.3	20.0
ノビタキ	133	121	128	71	65	68	52	46	50	12	10	11	22	20	21	214	195	205	4.3	3.1	3.7
ルリビタキ	150	133	142	82	75	80	64	55	60	10	8	9	23	21	22	256	209	223	5.3	3.4	4.3
ジャウビタキ	154	137	147	75	70	73	66	58	63	11	9	10	23	20	22	232	215	221	5.4	3.5	4.4
*ノゴマ	162	142	155	80	75	78	65	55	60	16	13	15	33	28	32	242	211	232	6.2	4.1	
*コマドリ	146	130	139	78	71	75	56	49	53	13	12	13	29	27	28	224	200	213	5.5	3.5	
コルリ	144	129	138	81	71	76	54	47	51	13	12	13	27	25	26	230	206	220	5.4	3.5	4.5



# 野鳥便覧 上巻の構成

◆ 序文 内田清之介

◆ 目次

自序

凡例 鳥類の名称、科名、学名、猟鳥禁鳥別、渡り、  
形状、大きさ、生息数の多少、色彩、鳴声、  
生息場所、食性、利害、分布、近似亜種等

総説

1 種の判定 2 渡り 3 繁殖 4 分布  
5 鳥数の数え方 6 観察地における諸注意  
7 記帳 8 予備研究 9 観察の時期  
10 観察の時刻 11 観察の機会 12 観察地域の限度  
13 渡りによる鳥類の類別 14 携行品その他

各論 主要鳥類78種を解説

# 序文 内田 清之介

## 序

本書の著者榎本住樹氏と私とは古いお馴染で、氏の野外鳥學の造詣には私も敬意を拂つて居る一人である。一言にして盡せば、氏は徹頭徹尾、鳥のフィールドワークを畢生業として來た篤學の士である。もと氏は軍籍に身を置かれたが、當時既に野鳥の觀察に熱中して居られた由だから、斯道における氏の足跡も思へば長いものである。以前、職を高野山中學に奉じて居られた時も、富士山麓や比叡山と並び稱される野鳥の天國高野山に立て籠つて、朝から晩まで觀察に餘念がなかつた。兼ねて農林省の委託を受けて研究に従事され、幾多の貴重な記録を寄せられて居る。極めて謙嚴篤實の君子人であるに拘らず、談一度野鳥の事になると、不退轉の意氣風發するのが例である。曾て農林省に鳥獸關係の囑託會議が開かれた際、川口孫治郎氏と佛法僧の啼聲に就て謬々の論を闘はした事は、今に語り草となつてゐる。思ふに氏に接する人は、必ずや氏の滿身に漲る野鳥愛好の潜熱を感受するに相違ない。宛然、氏は野鳥以外の事には關心を持つて居られぬか

のやうである。それほど星霜幾十年の起居を鳥と共に過されて來た人なのだ。現に氏は日本野鳥の會大阪支部の首腦として森田淳一博士等と共に献身的活動を持続されつつあり、近來關西方面に野鳥熱が鬱然と起つて來たのも、氏の存在に負ふ處が甚だ多い。探鳥會のある度毎に、指導者として氏の矍鑠颯爽たる雄姿は今やなくてならぬものになつてゐる。蓋し此の種の會合に於ける野外鳥學の講師としては、氏は比類なき適任者なのである。其人にして本著あり、正に鬼に金棒の感がある。いま其稿を拜見するに、流石に至れり盡せり、痒い處へ手の届くやうな出來榮である。著者の筆に成る色刷りの繪も申し分ない。同好の士のガイドブックとして、親切な役割を果す事と信じて居る。

昭和十三年二月

内田清之助識

# 総説 11 観察の機会

## 十一 観察の機会

鳥類の中には、一度見聞の機会を逸したら、観察者一生の間に、再びそれを見聞することの出来ない様なものも少なくないから、常に油断なく注意してゐて、不覚をとらぬ様にせねばならぬ。例へば、野外観察中何か一寸考へてゐる瞬間に、頭上を飛んで行つた鳥があるのに気がついて、急いで双眼鏡を眼にあてた時は、既にその鳥が遠くへ行つてゐて、單に今まで見たことのない珍しい鳥であることが判るだけで、種類の判定も出来ない内に、距離が益々遠くなるとか、何かに隠れるとかで、見えなくなつてしまふ様なことは屢々あるが、そんな場合に、もしも油断せずゐて、早くから知つてゐたら、鳥の種類も判り、それが一生に一度しか見られない様な、珍稀な鳥であつたかも知らぬのである。

或る種の鳥を観察中、他にそれよりも價値の多い珍鳥が出現する様なことがあるから、鳥を観察するのに熱心なことが必要であると同時に、寸分の油断があつてはならぬのである。これは昔の名剣士が、一時に數人の敵を相手として眞劍勝負をしてゐる時の氣の配り方と同様であると思ふ。

鳥類は飛ぶのが速いとか、保護色のため見付き難いことがあるとか、或は隠潜性に富んだものがある等

によつて見聞の機会を逸し易いものであるが、周到に注意してさへ居れば、其機会は案外多いもので、簡単な郊外散歩の時とか、室内に居ながら空を眺めてゐる際にでも、意外の見聞ができる場合があるから、ハイキング、登山、郊外ドライブ、汽車、電車、船舶等による旅行などの途中は、油断なく耳目を働かし、又旅行先でも好機を逸しない様に絶えず注意して居る必要がある。而して常に鳥の聲を耳にし、姿を目に入れることに意を用ひる習慣がついて來ると、遂には特に氣をつけてゐなくても、鳥が一聲鳴けば直に耳に入り、一瞬間姿を現せば直に目に映じ、尙一層進めば、夜間睡眠中にも、高空を飛んでゐる渡鳥の聲に目を醒ます様にさへなる。

常に餘り行かない様な、變つた土地へ旅行する際には、一層機会を捉へることに注意し、途中併に行先の鳥類に就て、出来るだけの観察をすることが肝要である。「今観察しなくてもまた來る機会もあらう」などと樂觀してゐても、遂に其機会が無しに終る様なことも少なくない。又假令機会があつて再び其處へ行くことができて、其時には土地の模様が變つてゐて、前にゐた鳥が見られないことも多く、萬一土地の狀態が元のまゝであつても、鳥類などは前回同様に見聞できるかどうか判らぬものと思はねばならぬ。

變つた所へ行つて、其處で數日間滞在するとか、乃

# 野鳥便覧 下巻の構成

## ◆ 目次

各論 上巻掲載以外の鳥類216種を解説

### ●上巻との違いは？ …… **繁殖についての記載**

はしがきの一部

繁殖に関する知識の普及は、かえって鳥類の減少及び絶滅を招きはしないかと思われる様な、我国今までの実状であったから、上巻には繁殖関係のことを掲載しなかったが、……（中略）子々孫々のためのも種々な天産物を愛護保存せねばならぬことや、それらを絶滅させるのが、国民の恥であることなどに、気のつく人も出来ることと思われるので、我国での繁殖状態が知られている種類のものについて概要を記することにした。

### ●肉の味についての記載

上巻、下巻とも猟鳥に関しては、肉の味のよし悪しが記載されている。  
現在の図鑑ではちょっと考えられない。

# コモモジロってどんな鳥？

るので、人によつては嫌ふ。従つて獵鳥としてよりも、優美或は壯大な姿が、棲住地の風景に、多大の趣を添へる價値の方が大きい。アジアの大部分、殊に東部と南部、蘭領諸島の大部分、フィリピン、ニューギニー等に、我國では殆ど全土に、それぞれ分布してゐる。巢は樹木の高所に、枯枝、枯葉等で造り、卵(約60.7×42.8mm)は橢圓形で、青綠色を呈し、卵期は四月一六月、卵数は四箇である。

## コモ、ジロ XII の 3

*Egretta alba modesta* GRAY 鷺科

鶯。夏。鷺型。凡そトビ大。丈高。少。圖版にあるのは春繁殖期の成鳥で、繁殖期外には背の飾毛がなく、嘴は黄色で、眼先の緑色も黄色となり、脚は純黒色である。野外で本種と間違へることがあるのはダイサギとチウサギで、前者は冬鳥で極めて少い鳥であるから本種と見誤る場合は殆どなからうと思はれるが、後者は夏鳥で、その数も多く、且本種と混棲してゐることが多いため、野外識別の困難な場合が少くない。即ち、兩種を捕獲して比較すれば、差違は判り易いが、兩種共頭を伸ばしたのと縮めたのによつて、外觀上の大きさに大差があり、チウサギの頭を伸ばしてゐるものは、コモ、ジロの頭を縮めてゐるものよりも著しく大形に見えることがあるから、一見したゞけでは、兩種を取違へることが多いのである。尙兩種の野外識別に関してはチウサギの所で述べる。飛方、餌の採方、食性等概してアササギに似てゐて、棲住場所も略、同様であるが、河口部などには、アササギ程頻々出現しない様である。鳴聲は稍大く、ガー又はグーときこえ、波りの際などに鳴いてゐることはあるが、平常は餘り鳴かない。單獨で居ることもあるが、四五羽の群をなしてゐることもあり、又チウサギの群に混じてゐる場合が最も多い様である。但し波りの際は通常チウサギと別々らしく、假令チウサギと行動を共にしてゐる時でも、同鳥の群から離れて飛んでゐるのを見受ける。人間には殆ど無害であるばかりでなく、雪白の色彩と優美な姿とは、夏の風景に雅趣を添へること多大である。印度



# かつては稀な鳥、今、最も普通種は？

76

普通は群をなし、時としては五六十羽以上の集団を見ることがある。形態と色彩が優美で、溪流や湖池等の風景に多大の趣を添え、好遊鳥としての価値は大きい。シベリヤ東南部、滿洲、支那、日本等に分布し、我國では樺太から臺灣に至る全部と朝鮮とに棲み、四季を通じて居る所と、夏季又は冬季何れかにだけ見られる所とがあり、その数はマガモやコガモなどに比べて著しく少いが、数年前から禁鳥となつたためか、近年僅に減った感があり、稀多数居る地方もある。果は水邊にある森林の樹洞を利用し、それに枯草、羽毛等を敷き、卵（約51×40mm）は橢圓形で、淡黄褐色を呈し、卵期は五月一六月、卵数は十一十三箇である。尙裏湖に産卵することもある。

ホシハジロ XVI の 9,10

*Nyroca ferina ferina* (LINNAEUS) 雁鴨科

鴈。冬。鴈型。ホシボツガラスよりも僅に大。稀。一見した所ヒドリガモに似てゐるが、雄の頭の中央に淡色部が無いこと、胸部の黒色であることが判れば區別がつき、雌は喉に白色部があつてヒドリガモにはそれが無いから識別される。鳴聲はクアツときこえるが、識別に役立つ程鳴かない。飛方は可なり速く、翼動が非常に速いので、實際以上に快速な様に見える。地上を歩くことは拙劣であるが、泳方は速く、潜水も巧で、尙外敵から逃れるために泳ぐ時など、體を低く保ち、水面上に出て居る部分を少なくすることがある。江灣、河口等を主住の場所とするが、内陸の湖池に来ることもあり又海上でも屢に見受ける。食餌は水生植物、貝類、小魚類、昆蟲類等が主である。單獨で居ることもあるが、多くは群をなしてゐる。時季と個體の如何により、海鴨としては肉味の佳良なことがあるので、獵鳥としての価値も一定してゐない。栗色の頭部や淡灰色の胸體等は、秋色を帯びた深い水との對照が美しく、觀望に好適である。舊大陸の北部で繁殖し、冬季には歐亞兩洲の各南部、及びアフリカ等に渡る。我國では千島を除いた大部分に分布するが、その数は少い方である。

◆ その他 当時と今とで状況が大きく異なる鳥

- ヒヨドリ: 山地で繁殖、一部は秋の中頃から平地に出てくるが、渡りをするものもある。
- キジバト: 近年激減する様であるから、保護の必要が多い。
- ケリ: 稀 本土の一部で繁殖するが近年非常に少なくなつていて、保護の必要は多大である。
- ウミスズメ: 普通 我国の諸地方で最も普通に見られる種類

などなど...

# 榎本佳樹と大阪の野鳥

1 大阪府郷土博物誌 第1編 (昭和9年6月刊)

大阪府の鳥類について **初の大阪府鳥類目録**

確認種＋確実と推定される192種をリストアップ

1934年3月調

大阪府鳥類の将来と保護について

(前略)

鳥類の将来に関しては実に寒心に堪えないものがあり、大阪府では特にそれが甚だしい様に思われるから、鳥類を愛好する人や、鳥類研究を事とする人等は、鳥類に関する知識に愛護心の普及に努めることを第一の急務とせねばなるまい。……

# 榎本佳樹と大阪の野鳥

## 2 大阪市内で繁殖する野鳥について（昭和14年3月）

### 16種の繁殖

・・・スズメの他ではただ〇〇〇〇が末長く市内に頑張り得る見込みがあるだけで、他のすべての種類は近い将来、年月とともに減少することはもちろん、種類によっては今後1年間余命を保ち得ないことが明らかなものさえあるので、鳥類の棲住による大阪市の風致は、絶滅の直前にあると言わなければならない、せめて一小部分でも鳥類の棲住繁殖に適する場所を保存して、無くなれば将来絶対に復元できない天然記念物である鳥類の地方的絶滅を防ぎたいものである。

〇〇〇〇は・・・

当時から大阪市内中心部の諸所に点在する銀杏樹に営巣繁殖し、市の周辺部や郊外ではほとんど繁殖しない一種独特の習性を持っている。

答え ササゴイ



# 榎本佳樹と大阪の野鳥

## ◆ 当時の調査地や 探鳥会の場所

- 1 住吉浦(現在の南港)
- 2 淀川、新淀川河口
- 3 南河内の御陵(仲哀応神陵付近)
- 4 箕面(阪神支部第1回探鳥会開催地)
- 5 岩湧山(大毎野鳥の会第1回探鳥会)

中西悟堂と榎本佳樹が岩湧寺本堂で講演  
聴衆4百人

- 6 生駒山
- 7 山田池

など



▲住吉浦で観察中の榎本翁

# 榎本佳樹翁が遺された言葉

- ◆ 私は標本を頭の中に入れております。敢て無味乾燥な標本などしまっておくよりも、野外に出れば生きた標本がおりますし、また生きいきとした姿や色は絵にして残しておけます。だから私は標本などを持たないのです。
- ◆ 一億人の日本人中、鳥類愛護の必要なことに気づいている人は、多くとも一千人位で、保護に努めなければならぬという考えを持っている人は多分百人にも達しないであろう。
- ◆ 鳥類は国有の宝物である。今の時代に生きている人間だけが楽しんで、その後は絶滅しても差支えないというものではない。われわれが楽しんだと同様にわれわれの子々孫々までも楽しませるべく、その保護と増殖に力を尽くすことは義務である。

# 榎本佳樹翁が遺された言葉

- ◆ 鳥類の研究は豊富な資産を有する人のすることで、貧乏人の為すべきことでないと、多くの人はいい、また実際その通りであると私もある程度感じているので、私などは何れの点から考えても「研究」といえる程立派な仕事を為しえておらず、定めし多くの人々の悪罵冷評の対象となっていることと覚悟している。(中略)

が、万一私が物質的に恵まれていたとしても、人に対し優越感を表示するような、アメリカ式なことは絶対にしないだろうと思われ、また今まで私が実際にやって来た、困苦窮乏や酷暑烈寒などと闘い、幾多の事情にも耐え、根気と体力を資として、汗や涙を流しながら、野鳥の生態観察に一生懸命になっているようなことを、恥とも思わず誇りにもしていないのである。

「野鳥」榎本佳樹翁古希記念号 経歴抜粋記より

野鳥の生態研究と愛護運動に  
捧げられた榎本翁の足跡を  
これからも、多くの人に伝えていきたい

おわり

(引用、参考文献:日本野鳥の会「野鳥」102号 昭和17年11月号  
榎本佳樹翁古稀記念 特集号、藤原廣蔵「大阪支部のあゆみ」1970  
年支部報NO39、1971年支部報NO41、1972年支部報NO45 、  
藤原英司「全集日本動物誌16 榎本佳樹 野の鳥の思い出」解説  
1983年講談社 など )